

指導者と選手の「やる気が出る教え方」の認識の差異について ～中高生を対象とした事例研究～

1190422 江口 遥奈
高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 概要

本研究では、指導者と選手の「やる気の出る教え方」における認識の差異について、県内のある女子卓球部の指導者と選手にインタビュー調査とアンケート調査を行った。その結果、指導者は選手との認識のズレは感じていた。また指導者は選手のやる気を出すための指導は意識的に行っていたが、やる気をなくしてしまう指導にはあまり意識が働いていないことが明らかになった。

2. 背景

私は約 10 年間卓球部に所属しており、「やる気が出る教え方」が、先行研究からも明確であるにも関わらず、現実にはそれが行われていないと感じている。

例えば、当時卓球の初心者だった私は、必死にボールに食らいついていたのだが、打ったボールがほとんど台に入らなかった。それを近くで見ていた監督にボールを体に投げつけられ、「やる気がないのか！」と怒鳴られた。この出来事は私のやる気を非常に減退させた。

選手のやる気を減退させようと思って指導をしている指導者はいないはずである。

このような経験から「やる気が出る教え方」には、指導者と選手との間で認識のズレが生じてしまっているのではないかと考えている。そこで本研究では、県内のある女子卓球部を対象とし、指導者と選手の「やる気が出る教え方」について認識のズレを明らかにすることで、指導者が選手のやる気を引き出す指導法を検討する。

3. 先行研究

矢澤（2013）の研究では、選手を激励する言葉がけや、選手を褒めるようなポジティブな言葉がけは、選手のやる気を向上させていたのに対し、選手を否定するような言葉がけや、選手を突き放すようなネガティブな言葉がけは、選手のやる気を減退させていた。また男子よりも女子の方が指導者からの言葉がけに敏感であり、やる気が左右されやすいことが分かっている。

また矢澤（2014）では、大学生女子選手を対象とした『指導者の教え方が選手のやる気に与える影響』について考察しており、選手の精神面を重視するような教え方は、選手のやる気を向上させていたが、指導者が選手とのコミュニケーションを図ろうとしない教え方はやる気を低下させていた。

3. 研究の目的

指導者と選手の「やる気の出る教え方」に関する認識のズレを明らかにすることで、指導者と選手のギャップを埋め、指導者が選手のやる気を引き出す指導法を検討する。

4. 研究の方法

県内のある中高一貫の女子卓球部の指導者 4 名（監督 1 名、コーチ 1 名、外部コーチ 2 名）にアンケート調査とインタビュー調査、そして女子選手 14 名にアンケート調査を行った。アンケートの質問項目としては、先行研究で紹介した『指導者の教え方がスポーツ選手のやる気に及ぼす影響』矢澤（2014）を元に筆者が作成した。

「やる気が出た教え方」の項目を上位 10 項目、「やる気をなくした教え方」の項目を上位 10 項目の合計 20 項目を用意した。

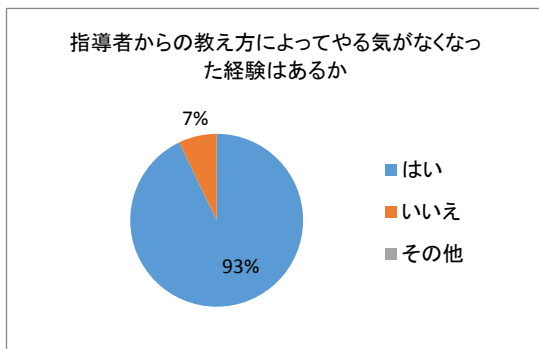
| やる気が出た教え方 | やる気をなくした教え方 |
|----------------|---------------|
| ①うまいプレーに対してほめる | ⑪プレーを全否定される |
| ②自信を持たせてくれる | ⑫決めつける |
| ③信じてくれる | ⑬意見を言っても全否定する |
| ④『勝てる』と言ってくれる | ⑭見下すように言う |
| ⑤楽しく教えてくれる | ⑮機嫌がすぐ変わる |
| ⑥盛り上げてくれる | ⑯乱暴な言葉使いをする |
| ⑦気持ちを分かってくれる | ⑰あきれた顔をする |
| ⑧細かい技術を教えてくれる | ⑱否定的な事を言う |
| ⑨チームの状態をほめる | ⑲いきなり怒る |
| ⑩必死さが伝わる | ⑳失敗を私生活に結びつける |

上記の項目に対して指導者には、「選手のやる気を出すために意識していること」について項目のみを提示し、「1. やらないように意識している」「2. やらないようにやや意識している」「3. 特に意識していない」「4. やるようにやや意識している」「5. やるように意識している」の5段階で自己評価をしてもらった。

また、選手に対しても指導者と同様の質問項目について、項目のみを提示し、「やる気が出た教え方」と「やる気がなくなる教え方」について「1. やる気がでない」「2. やややる気でない」「3. 特に何も感じない」「4. やややる気が出る」「5. やる気が出る」の5段階で評価してもらった。

5. アンケート結果

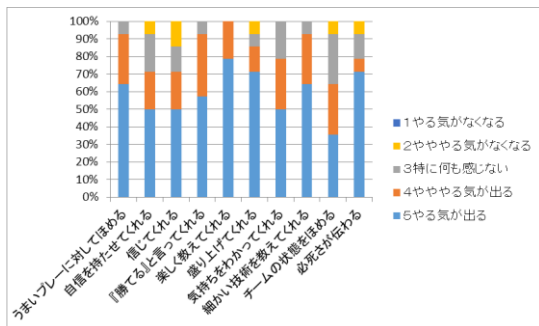
まず上記で説明したアンケート以外に、選手に対して「指導者からの教え方によってやる気をなくした経験があるか」アンケートを行った。



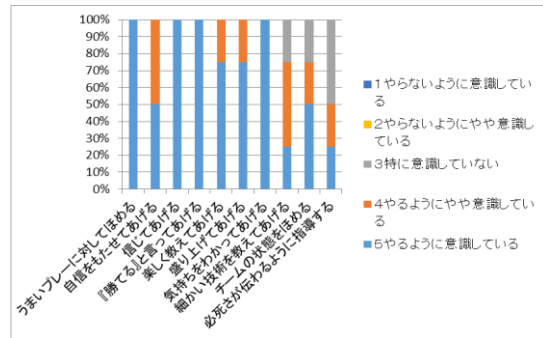
その結果、14名中13名が「やる気がなくなった経験がある」と答えた。

次に矢澤（2014）をもとに作成したアンケートの結果を、指導者と選手の意識の違いについて比較した。

選手の結果



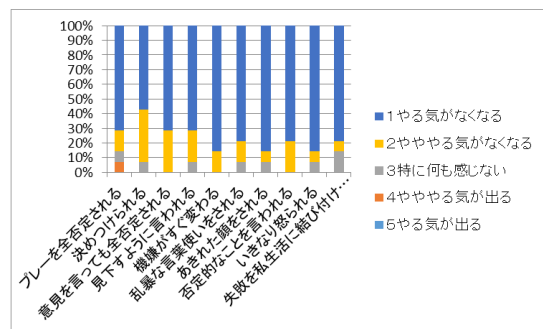
指導者の結果



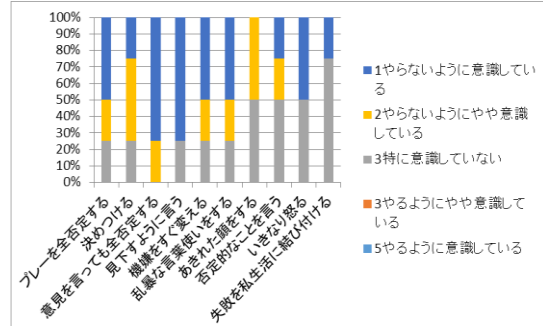
やる気が出るとされる教え方について、選手が一番やる気の出た項目は、「楽しく教えてくれる」であった。

また指導者が、「やるように意識していること」においては、「うまいプレーに対してほめる」「信じてあげる」「『勝てる』と言ってあげる」「気持ちをわかってあげる」が一番多かった。両者を比較してみると、「必死さが伝わる」は比較的、選手のやる気の出る割合が高い方であるが、指導者の「必死さが伝わるように指導する」には「特に意識していない」が最も多かった。

選手の結果



指導者の結果



次にやる気をなくすとされる教え方について、選手が一番やる気をなくした項目は「機嫌がすぐ変わる」であった。また指導者が、「やらないように意識していること」において「意見を言っても全否定する」が一番多かった。両者を比較してみると、「失敗を私生活に結び付けられる」は比較的、選手のやる気をなくす割合が高い方であるが、指導者の「失敗を私生活に結び付ける」には「特に意識していない」が最も多かった。

また今回のアンケートの結果において、選手はやる気が出るとされる教え方よりも、やる気をなくすとされる教え方のほうがやる気に影響を及ぼしやすにも関わらず、指導者はやる気が出るとされる教え方では、「やるように意識している」や「やるようにやや意識している」が圧倒的に多かったが、やる気をなくすとされる教え方については、「特に意識していない」の回答が多くみられた。

6. インタビュー結果

6-1 監督へのインタビュー結果

1) 選手のやる気を向上させる上でどういうことを重要視していますか。

その子の特徴や長所を伸ばしてあげる。

2) 選手のやる気を向上させる上で難しいことはありますか。こちらの思いが上手く伝わらない。

3) 選手との認識のズレを感じたことがありますか。

(例えば、やる気を出すために言った言葉が、逆に選手のやる気を損なってしまった)

ないと思っているが、伝わり方によってはあったかもしれない。

4) 認識のズレがあった場合、選手に何かアプローチしましたか

A ないと思っているのでしていない。

5) 選手のやる気を向上させる為にした方が良いのにできないこと

A 選手が多くいる為、選手一人ひとりの要望に応えるのは難しく、すべての要望には応えきれない。

6) しない方がいいのにやってしまうこと

A 感情的になり、思わず言いすぎてしまう時もあるが、人によっては意図的に落としている。その度合いは選手による。

6-2 コーチへのインタビュー結果

1) 選手のやる気を向上させる上でどういうことを重要視していますか。

選手の特徴を伸ばすこと

2) 選手のやる気を向上させる上で難しいことはありますか。こちらの思いが上手く伝わらない。

3) 選手との認識のズレを感じたことがありますか。

(例えば、やる気を出すために言った言葉が、逆に選手のやる気を損なってしまった)

あると感じた。こちらが良いと思ってアドバイスをしても、受け取り方はそうではないかもしれない。

4) 認識のズレがあった場合選手に何かアプローチしましたか。

特にしていない。こういう考え方もあるのだと感じてほしい。

6) 選手のやる気を向上させる為にした方が良いのにできないこと

もともと卓球選手ではなかったため、選手の練習相手ができない。

7) しない方がいいのにやってしまうこと

つつい言い過ぎてしまう。

6-3 外部コーチ A へのインタビュー結果

1) 選手のやる気を向上させる上でどういうことを重要視していますか。

一番は指導者の熱意を見せること。

例え、体調が悪くてもしんどくても、選手にはそれを感じさせないようにする。

そしてそれを続けること。(発言に一貫性を持つ・練習場には積極的に行く)

2) 選手のやる気を向上させる上で難しいことはありますか。

選手1人1人性格が違うため、選手に合わせた指導法を見つけること。

3) 選手との認識のズレを感じたことがありますか。

(例えば、やる気を出すために言った言葉が、逆に選手のやる気を損なってしまった)

ある。最初のうちは、選手の性格がわからなかった。

4) 認識のズレがあった場合、選手に何かアプローチしましたか。

選手の様子を見て、どのような指導法があっているのかを試行錯誤した。

6) 選手のやる気を向上させる為にした方が良いのにできないこと

卓球は様々な戦型があるため、数多くの知識が必要。知識が乏しい線型に関しては、間違っただけを教えられない。

7) しない方がいいのにやってしまうこと

選手自身が自ら考えてやるのが重要だが、技術面において教えすぎてしまう時がある。精神面において、言い過ぎたりしてしまうことはない。

6-4 外部コーチ B へのインタビュー結果

1) 選手のやる気を向上させる上でどういうことを重要視していますか。

選手の長所を見つけてあげて、それを伸ばしてあげる。

2) 選手のやる気を向上させる上で難しいことはありますか。

選手本人の目標が低い人や、本人のやる気がない人は難しい。

3) 選手との認識のズレを感じたことがありますか。

(例えば、やる気を出すために言った言葉が、逆に選手のやる気を損なってしまった)

あまりないように感じるが、言い過ぎてしまったと思う時がある。

4) 認識のズレがあった場合、選手に何かアプローチはしましたか

やる気を向上させる為に言い過ぎてしまったことを、様々な角度からアドバイスすることで、選手にうまく伝わるようにフォローする。

6) 選手のやる気を向上させる為にした方が良いのにできないこと

特にない。

7) しない方がいいのにやってしまうこと

言い過ぎてしまう。

7. 結論

今回のアンケート調査とインタビュー調査を通じて分かったことは、指導者自身は選手のやる気を向上させる上で、熱意や思いが上手く選手に伝わらないと感じつつも、やる気を出す指導については、認識のズレがないと思っている、またはあったとしても、その後選手に何かアプローチすることはないと答えた指導者が多くいた。またアンケート調査から、選手のやる気を出すために意識的に、やる気が出るとされる教え方を行っているが、やる気をなくすとされる教え方のほ

うが、やる気に影響を及ぼしやすいにも関わらず、選手のやる気をなくすような教え方にはあまり意識が働いていないことがわかった。

このような結果から指導者は、選手のやる気を出すことに関しては意欲的であったが、やる気がなくなってしまう可能性に対しては比較的無関心であるということがわかった。

8. まとめ

本研究において、指導者と選手の認識のズレをなくすためには、指導者が積極的に選手と「会話」をすることが重要であるのではないかと考えた。

指導者へのインタビューの中で「やる気を出す教え方」について「選手との認識のズレがないと思っている」または「あったかもしれないが、その後特に何もしていない」と答えた指導者は多くいたが、指導者と選手の間では、教える側の指導者と受け取る側の選手では意思疎通が一方的になりがちである。選手の意思確認を怠ってしまうことで、教える側である指導者は選手と意思疎通が図れていると思ってしまうのではないかと考えた。現に14名中13名の選手がやる気がなくなった経験があるということは、それらの教え方は選手にとってベストな教え方ではなかったということである。

このようにならないためには、指導者が一方的に指導するのではなく、選手がどのように感じ、何を思っているのかを聞き出し、積極的に会話をする必要があるのではないかと考えた。

また選手を指導する上で、やる気を出す指導に重点を置きがちであるが、どのような教え方をしたら選手のやる気を減退させてしまうのかも理解し、常に意識しておくことが、指導者と選手の認識のズレをなくすために有効であるのではないかと考えた。

参考・引用文献

『指導者からの言葉かけが選手のやる気に与える影響』

矢澤久史

https://www.istage.jst.go.jp/article/pamjaep/55/0/55_357/article-char/ja/

『指導者の教え方がスポーツ選手のやる気に及ぼす影響』

矢澤久史

http://www.myschedule.jp/jpa2014/tex_output/source/jpa2

[014_poster/90128.pdf](#)